

広島大学大学院文学研究科論集 第七九卷（二〇一九年十二月）別刷

菅原道真仮託歌集 『瑠璃壺之詠歌百首』（架蔵・卷子本）

— 翻刻と解題 —

妹尾好信

菅原道真仮託歌集『瑠璃壺之詠歌百首』(架蔵・卷子本) 翻刻と解題

妹尾好信

【キーワード】 菅原道真仮託歌集 瑠璃壺之詠歌百首 菅家瑠璃壺和歌 菅原道真 嵯山元賢

〔凡例〕

- 一 いわゆる菅原道真仮託歌集の一伝本である架蔵の『瑠璃壺之詠歌百首』(卷子本・1軸・享保十四年 一七二九 写)を翻刻し、解題を付した。
- 一 翻刻にあたっては、次のような処理を施した。
  - 1 変体仮名はすべて現行の字体に改めた。漢字については、できるだけ原本の字体を尊重したが、特殊な異体字は通行の字体に改めた。
  - 2 和歌は、底本では散らし書きにされているものが多いが、翻刻では句順を検討した上で1行に記した。その際、各句ごとに1字空白を置いた。但し、97・98番の両首については、原本の表記を再現した上で後の括弧内に句順に従った表記を示した。
  - 3 71番以降の歌に存する左注については、底本通りの改行とはせず、適宜追い込みにして記したが、底本の改行箇所には/を付した。
  - 4 序にあたる前書、跋にあたる巻末の識語・奥書、系図に関しても、前条と同様の処置をした。
  - 5 底本には虫損のため判読不能な文字がいくつか存する。その場合は、で表記し、右忘つし稿? 跡、上再置置【置を記した。
- 2

〔翻刻〕

百首

瑠璃壺之詠歌百首者

菅相公。政事餘暇。興詠吟嘯。而自的心/物艸稿。納瑠璃器。昌泰

年中。左遷之/時。又携一器下筑石。隨見興已作觸/聽。而感自

生之和歌百首。改以入壺/中。

聖化上天之後。度會神主。飛鳥春彦。有/故給瑠璃壺矣。春彦者飛

鳥冬綿。同/胞之弟度會大神主高主子。白太夫/是也。與

菅聖友善。筑石左遷之時<sup>(題)</sup>下。

聖化後。隱京師。事果而神上焉。

菅相公神靈輝天下。北野宮祠。/稱 聖廟。天滿大自在天

神之尊/號者。現靈神而。奉幣祭典。住吉/八幡 北野 三

所者。現形而雖/交人間威德等。

天神者。異諸社。於 禁中。定精進日。同/觸穢。北野之外。古

代無其例。當世/住吉 八幡。祭禮等有所遵。

現靈神之稱號。秘事也。天子自精<sup>(進)</sup>/而御信心。日日新者。

天滿宮爾。抑 現人神之事。三所之外。/無由緒。

菅家寶藏中。聖作神詠。傳在也。爲/尊詩文。而和歌少也。

此瑠璃壺百首。道真無盡經也。金玉/中。三十首爲秘歌。唯慕久

而得求。有/因緣師授宣叶

聖意叨莫落凡情見解。信仰之輩。拓香/禮拜唱。隨志

神詠。天感應護。而忽成諸願。急々如律/令

1 ふりそはゝ ふかくはならし 中 に 下より消る 春のあ

はゆき (1)

2 かすみても 月やあらめと 思ひより 我身ひとつは 涙なり

けり (2)

3 佐保姫か かさしのかつら かけてこそ なかき日に咲 花は

みえけれ (3)

4 ちるまゝに 青葉にしける み山邊の 梢やうすき 花のしら

(4)

5 うきときや こころのたねと なりぬらん 白雲かゝる 小田

の苗代 (5)

6 浮世遠波 秋農山風 幾賀之登天 雲古曾月能 隠家尔那礼

(6)

7 かたりてや 家つとにせむ 一枝も おるをゆるさぬ はなの

かへるさ (7)

- 8 吹よはる かせをつらみて 木かけより ほかにはふらぬ 花  
のしら雪 (8)
- 9 散るはなを 薪のうへに 吹かけて あらしをおはぬ 山人も  
なし (9)
- 10 宵のまに 咲そふはなの 雲見えて 川上かすむ あけかたの  
そら (10)
- 11 行水の 中の小鳥の 川柳 なみのもて来し まゝにうえけむ  
(11)
- 12 明ほのゝ いつくさかいと かすむらむ はなのあなたの 峯  
の松はち (12)
- 13 川音は 霧消しより とたえして 風のかけたる はなのうき  
はし (13)
- 14 ふしのねは 雲より上に 影出て 禁の水に なるさはの月  
(14)
- 15 松風の 音をいかてか うつむへき つもらてそふる 月のし
- らゆき (15)
- 16 みよし野ゝ 桜を海と みつしほに 花の見るめを かつく山  
人 (16)
- 17 <sup>(註)</sup> かかたに わきてぬしとや にほふらん 中垣に咲 梅のは  
つ花 (17)
- 18 さとまては ふりもつもらぬ 初雪を 筏にのせて 下る仙人  
(18)
- 19 朝ほらけ はまなのはしは とたえして かすみをわたる は  
るの旅人 (19)
- 20 たかね山 ふもとのくらぎ あけほのに 霧の上行 秋のたひ  
人 (20)
- 21 影うすき 夕日の名残 波そめて くれないたゝむ 八重のし  
ほかせ (21)
- 22 ともすれは 身はうき草の あやめくさ 引れやすきや 心な  
るらむ (22)

23 さそはれて 此宿までは 月に來つ さのみはいかゝ 夜も更  
にけり (23)

24 捨てこし 身にともなはゝ 月もなと むかしの秋の 思はさ  
るらん (24)

25 吹よはる 風よりはるゝ むら雨の 世は定なき ものとしら  
すや (25)

26 人のもつ 薪の上に 雪を見て 山のさむさを おもひこそや霜  
文然ほ  
辛荳灯子  
6 于 kcal  
川6 于 kcal ^ D 尊人人の  
2 œ  
左 人 人 の

- 38 玉くしけ はこねの宮井 かくれなく 見あけて久し 月のう  
みつら (37)
- 39 水鳥の はやきなかれに さそはれて たえぬも聲の 遠さが  
り行 (38)
- 40 夢さそふ 軒端の荻の 風の音に こいしき秋の ねさめなる  
らむ (39)
- 41 しるへせし 軒端のをきの 風もたえ わかれに秋の つれす  
ともよし (40)
- 42 夜もすから ひかぬなるこの 聞ゆるは 月をゆるかす 風の  
うきなみ (ナシ)
- 43 磯山に 峯のまつかせ めくりきて 波やひくらむ からこと  
の音 (41)
- 44 嶺に見る 雪もふる野に とをからす 月の寒さや 風の松原  
(42)
- 45 旅人の 馬さへきなる たまり水 あなつの花の 月さはくな
- り (43)
- 46 やとりそひ 山下水に かけつつす 桐のかはりに はひろの  
柏 (44)
- 47 常盤木と なに思らむ これほとに 雪のはなさく 松のえた  
さし (45)
- 48 吹保登波 楚禮土聞衣之 音絶天 嵐遠埋無 雪濃松原 (46)
- 49 おとゝしも 去年もことしも 咲はなの その<sub>(目)</sub> ちきりと た  
れかいひけん (47)
- 50 しくれてや 中 秋を 残すらむ もみちにわかぬ みねの  
松はら (48)
- 51 よしこゝろ 思ひもはてよ 捨てこし 身のかへるへき むか  
しならねは (49)
- 52 ちりそふる 花の木の間の 春かせに いてつる月や おほろ  
なるらん (50)

- 53 よしなくも 命にかえて おもふなよ 我が身の為に 鶯のこ  
ゑ (51)
- 54 もゝしきの 木ゝにまきれぬ 花咲て ともしの中の 人も恋  
しき (52)
- 55 あちきなや たとへはおもふ ことのみな 叶へたりとも 夢  
の世の中 (53)
- 56 数ならぬ 身ほどの山の おくはなし 人とはぬを かくれ  
かにして (54)
- 57 吹あけて 空に花もつ あらしこそ 雲の梢を 風つとふなれ  
(55)
- 58 さみたれの しのたのもりの かけしけみ 空にしられす ぶ  
る雫かな (56)
- 59 もろこしを 幾重か雲の へたつらむ とらのときまで 出ぬ  
月かけ (57)
- 60 静なる 深山のおくも なかりけり もとのこゝろを つれて
- 61 山人の 笠も薪も うつもれて 雪こそくたれ 谷のほそみち  
(59)
- 62 ふりつみて ふねとは見えぬ 松かけに 雪をそつなく うち  
のあま (60)
- 63 隔つる 竹の一むら ふりしきて 隣を見る 雪のあけほの  
(61)
- 64 をのつから 木かけにつもる 落葉こそ かせのとりたる 薪  
なりけり (62)
- 65 うらさとの 浪のよれかし しほくみて 月をそになふ あき  
の海士人 (63)
- 66 かけうつす 浪を磯邊に ふきよせて 月も岸つつ あきかせ  
の聲 (64)
- 67 よもすから 嵐に窓を たゞかれて あくれは庭の 木の葉な  
りけり (65)

68 ふけはこく よはれはうすき 梅か香の あらしにのこる 夜  
半の手まくら (66)

69 行すゑも いそかれながら ともすれは 都に帰る 我心が  
な (67)

70 世の中の うきをならひと いふ人や いとはしとの こゝ  
ろなるへし (68)

秘歌三十首

71 朝ほらけ 須ら船は みえすして かすみにかかふ そら  
の松原 (69)

心つくしの御舟にめされし時ノ海原のあけかた霞てわきか  
たノければ前途さためかたくノ生涯わきまへかたしと演ノ  
て情分より出たる御哥

72 はたつらに あらしをつしと おもひなは 吹ぬまにこそ 花  
は散けれ (70)

返照常理

73 咲そえて それともみえぬ かつらきの はなのよそなる 峯  
のしら雲 (71)

高加茂事代主命のノかむいさをしをよみ給ふ

74 明わたる 志賀のはままつ ほの と さく波かけて たつ  
かすみかな (72)

唐崎の神垣をノ志賀のはま松と申也

75 月たにも もらぬみ山の 下條に いつふる雪の まより残ら  
む (73)

76 いにしへは 春のならひに みし月の なみたに霞む 老は來  
にけり (74)

生老病死の中に老ライタルノコト和哥の情分<sup>(世)</sup> 述懐ノ第  
一ノ是ニアリトハノ昔ノ聖ノ御辭

77 もしほくむ 涙のはまの あまころも ぬれそふ袖や さみた  
れのころ (75)

涙ノ瀆蠶衣ノ筑石ノ歌枕ニ非スノ始テ詠セサセ給フ奥意アリ  
ノ春彦能ク聞ケリ

78 ものゝふの 矢田野に生る 土筆は 弓と筆とを 取合けり



(76)

79 いつの日の いつの時にとか むすかたぶたるへき 命そや人の ははてはし  
るらん (77)

マヅ、ハリ

産タマヒスヒシ霊ノ神ス事シ八現ケ形ウ阿ウ羅布フル留アマ天ノ命ミ也コト

硯ノ利生ス、ロニテノ住吉太神ノ御影寫ノラセ候也

80 人しれす かゝるうき名の 立ぬるは ちりや硯の うへをふ

きけん (78)

神佛さへノ息を屏ノ事成にノ凡心穢ノ息ヲフクコト恐ルヘ

シノ教誡

81 枝イに布ふる 雨そ木す糸の 葉を生天 ちらぬこそ花の 命なりけ

りれ (79)天アサ育ナあるハといハふハ心ナなり

82 足イ曳布の 更科山の ゆふ立に 雲の衣は あらはれにけり

(80)

哥カ枕マノ躰タ毛モ常ト非ヒス

83 山あゐの あしたの霧は 海に似て なみかと聞は まつかせ

の音 (81)

天アマ拜ヒ嶽タケノ朝アサ氣キ色シロノ心ココロ目メモスミノワタル目メ前マエノ躰タ愁シレトモノ  
聖ホ意イ八ヤツノ不フ可カ向ム

84 夏もなを 雪見るふしの やまかけは 煙の末に 明やすき月

(82)

御哥躰ノやまひめもまのあたりノ現れぬへき神詠也

85 なかしふる 身はうきくさの 根を絶て 鳴ぬ間そなき 水と

りのこゑ (83)

つくしは冬の夜水鳥のノさそふ聲につけてノ御目覚かちな

るをノ春彦きけり

86 むらさきの 花なき時も 野をみれば 萩の戸あけし ふしつ

ほのあき (84)

藤フジ壺ヒノ秋アキをノ思オモ遣ツノ御詠吟尤哀深シ

87 中 に ふきしくときは をとたえて よはれはそよく 萩

のうは風 (85)

88 老て聞は いかてうからん いにしへを おもはぬたにも

きのうはかせ (86)

89 なきぬらす 袖にはいかゝ やとるへき くもりならはぬ 秋  
 の夜の月 (87)

90 山の端にの 雲の衣を ぬき捨て ひとりや月の すみのほるら  
 む (88)

91 ころは秋 時はたくれ 身は老つ なにゝなみたの おちとま  
 るへき (89)

菌化シテノ只盤ノコトク腮ヲ机ニモタセケレハ額ニカ、  
 セ玉フ

92 はら と 霰降屋の 板ひさし 苔むすかたは 音もきこえ  
 す (90)

返照常理

93 わかかけに 勝る入江の つなかれて ころの駒に 身をそ  
 のせたる (91)

94 あつさ弓 柳のいとち 花咲し ある月かけに かすみつこか  
 す (92)

征西將軍ノ故事ヲ書セ給時ノ詠歌に

95 春風の おとつねながら あやしけれ 垣ねのはなも 香ほり  
 そひつゝ (93)

文字又章子神代ヨリ古人也

96 花も見む すき人ならば 梅のゆの このみのたねを わりて  
 すつるな (94)

教誠ノ中神秘ノ至極也

古今誹諧和歌

ものをしひふひとの  
 すきみのいらん

ら む

97 む さ の  
 す き も

め き 身

の と の

の て な

み ひ と

は の れ

の い ふ

な 後 速

(むめのはな さきての後の 身なれ速) すきものとのみ ひと  
 のいふらむ (95)

98 なてしこの

うすくもこ

くもひくな

れは見むひ

とわきてお

もひさため

よ

(なてしこの うすくもこくも ひくなれは 見むひとわきて  
おもひさためよ)(96)

99 心こそ かはらすとても せめて世に しられぬほと 山さ

ともかな (97)

100 ことはりを よそになしては しる人の 我身のとかに など

まよふらむ (98)

瑠璃壺秘歌三十首は

菅聖公御心のよりとてころ／ありて人の為に准らへ／教ゆへししかあ  
れとも／調かすかに曲高情こもれり／昌泰のあわれなる年に／い  
たりては現影已にあまねく／おふる時なりとなみ ならず／世  
はなれたる神ことをのみおこ／なはせ給ひ雲かくれの後  
天満天いたらぬくまもなし／光のまへに神かたちをあら／はし給ふ

春彦のみまさしう／逢たてまつりけり末の世

天神の御哥とて残れるはおく／夢うつゝに告させ給ふ

かゝらくのはつせの／寺のほとけこそ北のゝ／神とあらはれにけ

り  
唐ころもかけし北野ゝ／神こそは袖に／もちたる梅にてもしれ

かうよふのたくひ多し

聖化昇天の後も跡を垂てあま／ねく世の為に大慈大悲の／御名を残  
し給ひて

南無天満天神と唱へ奉る／夫のみならず文才風雅

荒人神と敬うも日のもと／百代の末にあら人神といわれんは／我な

りとて月雪に現形／し給ひ詠哥を唱ふる時は心に

天神をあかめかたちやすらかに／して一首を詠せん人には／影身に

そはんとの御ちかい／春彦よくきけり

寛治二年

二月廿五日 三木正一位 大蔵頭為長

菅家二位為長系圖

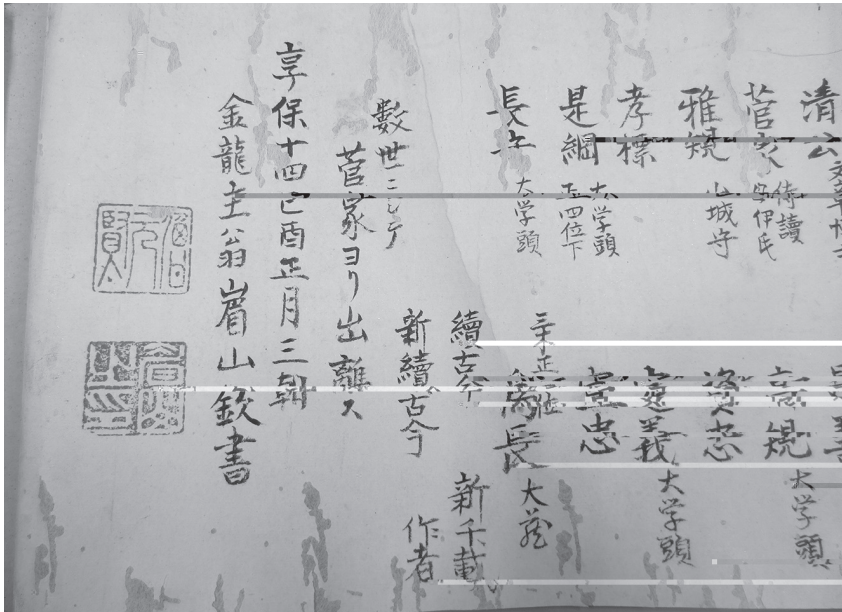
宇庭阿波守 古人 遠江守

天平元賜菅原性(つ)

清公 文章博士 是善 文章博士

菅家 侍讀 母伊氏 高規 大学頭

雅規 山城守 資忠  
 孝標 定義 大学頭  
 是綱 大学頭  
 正四位下 宣忠  
 長守 大学頭  
 三木正二位  
 為長 大蔵  
 續古今 新千載  
 新續古今 作者  
 數世ニシテ  
 菅家ヨリ出離ス  
 享保十四己酉正月三朝  
 金龍主翁嶺山欽書  
 印 印  
 (僧元賢)(眉山之印)



本書 巻軸部分

## 〔解題〕

ここに翻刻したのは、架蔵の卷子本『瑠璃壺之詠歌百首』1軸で、中世から近世にかけて多数作られた菅原道真仮託歌集の一伝本である。はじめに書誌を記す。

写本。卷子1軸。縦約一九〇m、長さ約一一m。巻末に、「享保十四己酉正月三朝 金龍主翁嶋山欽書」との書写奥書があり、享保十四年(一七二九)一月、「金龍主翁嶋山」なる人物による書写であることが知られる。全体に虫損が進んでいるが、近年丁寧<sup>ニ</sup>に全面裏打ち補修がなされており、本文の判読に大きな支障はない。補修時に緞子張りの表紙が付けられているが、題簽に外題は書かれていない。内題もないが、巻首に置かれたやや長文の前書の冒頭に、「瑠璃壺之詠歌百首者」云々とあるので、書名は『瑠璃壺之詠歌百首』であることが知られる。

書名に「百首」とあり、前書の後の歌集冒頭にも「百首」と記されている通り、本書は百首の和歌を載せている。しかしながら、四季・恋・雑のように部類されたいわゆる百首歌ではない。詞書を持たない和歌が七十首続き、その後「秘歌三十首」として別に括られた和歌三十首を加えて百首となる。この三十首には、多く和歌の後に左注の形で詠作事情や和歌の内容についての説明書きが記されているのが特徴である。

和歌は独特の散らし書きがなされたものが多く、中には歌句の順

が分かり難いものもある。底本には、和歌の冒頭に朱で小さな丸印が付されており(翻刻では省略)、中には歌句順が不確かなものも存する。

「秘歌三十首」が終わると、「瑠璃壺秘歌三十首は」で始まる識語のような文章があり、この文章中には、天神の詠歌として、「かゝらくのはつせの寺のほとけこそ北のゝ神とあらはれにけり」「唐ころもかけし北野ゝ神こそは袖にもちたる梅にてもしれ」の二首の歌を載せる。末尾に、「寛治二年二月廿五日 三木正二位大蔵頭為長」とあって、この歌集の編者が菅原為長なる人物であることを記す。

続けて「菅家二位為長系圖」を載せ、為長が道真から十代目の子孫であることを記すが、夙に武井和人氏が後掲書で指摘されたように、堀河天皇の御代である寛治二年(一〇八八)に該当する人物はおらず、これは極めて信憑性の低い奥書と言わねばならない。

書写奥書に見える「金龍主翁嶋山」は、河内国出雲井郡(現在の大阪府枚岡市)にあった黄檗宗の寺院、金龍山神護禅寺(明治四年一八七二に廃絶)の二代目住持、嶋山元賢(生没年未詳)。京都の門跡寺院宝鏡寺が蔵する『妙法天神経解釈』(享保十五年一七三〇成立)の著者として知られる。嶋山については、小峯和明氏編『<sup>宝鏡寺</sup>妙法天神経解釈』全注釈と研究(平成十三年 笠間書院)に収められた渡辺麻里子氏の論考に詳しい。本書奥書の署名に添えて捺された僧元賢「眉山之印」の陰陽刻二種の方形朱印は、『妙法天神経解釈』の自叙末にもある。

道真仮託歌集の類の伝本を博搜して分類・整理された竹井和人氏の研究（菅原道真仮託家集・百首歌研究序説『中世和歌の文献学的研究』平成二年 笠間書院 所収）によれば、本書は、氏がA系統と名付けられた「寛治2年菅原為長奥書本系統」に属する伝本であることが明らかである。武井氏は、同系統の伝本として、

東北大学附属図書館狩野文庫蔵『天神御独吟』（四・一〇七三六）

所収「瑠璃壺之御詠調百首」宝暦三年腰越与兵衛写。

龍谷大学附属図書館蔵「菅家瑠璃壺和詞」（九一・二三・七四）写

字台文庫旧蔵。江戸中期写。

36 ことやまのしらへにあまるふしのねもみあけて久し月のうみ  
つら 37 こと山のならへるにあまるふしのねは雲よりうくもは  
なをふもとにて

37 玉くしけはこねの宮にかくれなく雲よりうへはなをふもとに  
て 38 玉くしけはこねの宮井かくれなく見あけて久し月のう  
みつら

40 しるへせし軒はのをきのよもすからかせもたえよしかれに  
秋も 41 しるへせし軒端のをきの風もたえわかれに秋のつれ  
すともよし

44 桐の葉よはひろの椎つばきかけつす山下水にやとり所か 46 や  
とりそひ山下水にかけつす桐のかはりにはひろの柏

55 ふきあけて雲の梢をあらしこそ雲にはなもつ風つたふなれ  
57 吹あけて空に花もつあらしこそ雲の梢を風つとふなれ

94 梅の匂のすぎ人ならば花も見むこのみのたねをわりてすつる  
な 96 花も見むすぎ人ならば梅のゆこのみのたねをわりて  
すつるな

なお、本書には、後半「秘歌三十首」の中の四種の和歌について、  
本文の右傍に異文注記がなされている。まず、次の二首である。

79 いつの日のいつの時にかむかたすかたふへき命いのちや人のはてもしはるらん

81 枝にふる雨そ木す糸の葉を生天あまちらぬそ花の命いのちなりけり

他に、82の初句「足あし曳ひの」と、90の初句「山の端はたの」がある。わ  
ずか四首ではあるが、他本と校合された跡である。現在知られてい

る伝本では、龍谷大学本・東北大学本・富山市立図書館本の三本は  
すべて底本の主本文と同じであり、どのような本によつて校合され  
たのかはわからない。

### 〔他本との本文異同〕

残りの紙数を使つて、底本と他伝本との本文異同を掲げておく。

単純な仮名遣いの相違や、意味の変わらない漢字と仮名の表記の違  
いなどは原則として省略した。校合した他伝本三本の略称は次の通  
り。龍谷大学本については、便宜上、武井氏の翻刻によつた。

(龍)： 龍谷大学図書館 写字台文庫蔵本

(東)： 東北大学附属図書館 狩野文庫蔵本

(富)： 富山市立図書館 山田孝雄文庫蔵本

前書 (龍谷大学本二八ナシ)

〔巻首題〕 瑠璃壺之御詠詞百首 (東) 瑠璃壺之詠歌百首

瑠璃壺之御詠歌百首 (東・富) 餘暇 餘暇ヨカ (富) 自 自

ラ (富) 的心物 取の物 (東)・取テ的物 (富) 瑠璃壺矣

瑠璃壺 (東・富) 春彦者……白太夫是也 (割書) (富)

下 随下 (東・富) 天神者 天神 (東・富) 異諸社

……同觸穢 (割書) (富) 觸穢 觸穢荒人神也住吉八幡 (東・

富) 祭禮 八幡之祭禮 (東・富) 精 精進 (東・富)

現人神 荒人神 (東・富) 傳在也 傳也 (東・富) 而和歌

- 矣和歌(東)・矣和歌者(富) 盡経也……唯 ナシ(富)  
 得求 不得求(東) 聖意<sup>ニ</sup> 聖意<sup>ニ</sup> 叨<sup>シ</sup>キリニ(東)・聖意<sup>ニ</sup>  
 叨<sup>シ</sup>ニ(富) 而忽 忽而(東・富) 百首 ナシ(東・富)  
 2 思ひより 思ひよる(龍・東・富) ひとつは ひとりは(東・富)  
 3 佐保姫か 佐保姫の(龍)  
 4 ちるまゝに 散まゝの(龍) しら しら雪(龍)・しら雪  
 (東・富)  
 5 小田 山田(龍)  
 7 かたりてや かたりてて(富)  
 8 吹よはる 咲かはる(龍)・吹かはる(東・富) うちみて  
 たのみて(龍)・うつみて(東・富) しら雪 しら雲(龍)・東・富)  
 9 おはぬ おはむ(龍)・おはん(東・富) 31  
 11 もて来し もて来て(東)・もて来て(富) まゝに ま  
 に(東・富)  
 13 霧消しより 霧消し(龍) うきはし うきは (龍)  
 14 禁の水になるささの月 ささのみ? 麓の水になる(龍)  
 15 しらゆき しら雲(龍)・東・富)  
 16 みつしほに みつしほの(龍)  
 17 かかたに 誰かために(龍)・誰ために(東・富)  
 18 下る 下す(龍)
- 20 「和歌全体」 明くれに霧のうへ行たかねやまふもとのくらき  
 秋のたひ人(龍) あけほのに 明くれに(龍)・明更に(東・富)  
 21 影うすぎ かけうつす(龍・東・富)  
 23 いかゝ いかし(富)  
 26 上に雪をみて 上を雪に見て(龍・東・富)  
 27 いゝけり いひつる(龍・東・富)  
 28 むめのにほひはかせのたきもの にほひはかせのむめのたきもの(龍)  
 29 雲より 雲の(龍)  
 30 秋のみゆきは のるもの見れは(龍)・秋の物見は(東・富)  
 31 夜の 江の(龍)・日の(東・富) かけてゝ かけて(東) 文  
 32 「和歌全体」 ノ庇て (体 色体 東 き 夫(率ひの)



- 41 夢さそふ 夢さそふしるへせし(富) 風もたえわかれに秋のつれすとも  
よし よもすからかせもたえよしわかれに秋も(龍) 秋の  
秋も(東・富) つれす よらす(東・富)
- 42 「和歌全体」 ナシ(龍) うきなみ うきなは(東・富)
- 43 めくりきて 吹めくり(龍・東・富) からことの音 ことの  
音かよ(龍)・かよことの音(東・富)
- 44 見る 降(龍) 雪 雲(龍)
- 45 きなる 本ノマ、 ?なる(龍)
- 46 「和歌全体」 桐の葉よはひろの椎かけつつす山下水にやとり  
所か(龍)
- 48 吹保登波楚禮土聞衣之音絶天風遠埋 吹保登波楚禮土聞衣之音  
タヘテアヲウツ フロホトハソレトキコエシヲド  
絶天風遠埋(東・富)
- 49 咲はなの 咲花を(龍) その その日(龍・東・富) い  
ひけん とひけん(富)
- 51 こころ こころ(東) 捨てこし 捨ててし(龍)・捨てはし(東)  
春かせに 恣風に(龍)
- 52 かえて かへて(龍・東・富)
- 53 とはぬを とわぬを(富) かくれかにして かくれかるして  
(東)
- 57 「第二丁四句」 雲の梢をあらしこそ雲にはなもつ(龍) あ  
らしこそ あらしこそ(東・富) つとふなれ つたふなれ  
(龍・東・富)
- 58 空に 雲に(龍)
- 59 幾重か 幾重の(東)・幾重(富)
- 61 笠も薪も 袖も薪に(龍)・そもも薪に(東・富) うつもれ  
て うちわれて(東・富)
- 62 薪なりけり 薪なりける(東・富)
- 65 しほくみて しほひみて(龍)
- 66 うつつす うつつる(龍) 岸つつ みねうつ(龍)・峯うつ(東・  
富)
- 68 のこる イハハル のこる(龍)・かはる(東・富)
- 70 「下の句」 ナシ(東・富)
- 71 秘歌三十首 瑠璃壺秘歌三十首(龍・富)・瑠璃壺 秘歌三十  
首(東) 須戸うら船は 須磨のうらはに(龍)
- 72 わきまへかたし 無弁(龍)・無辨へ(東)・無辨(富) 演て  
演らる(龍)・演ヌル(東)・演(富) はたつらに ひたすら  
に(龍・東)・なたすらに(富) うしと そしと(龍) 散  
けれ 散らん(龍)・散けり(富)
- 73 返照常理 返照常俚(龍)・返テ照常理ヲ(富) 咲そえて 咲  
そへて(龍・東・富) みえぬ みへぬ(東・富) 高加茂  
高賀茂(龍) 命の 命之(龍) いさをし いたをし(富)
- 75 み山の こよひの(東・富) 下條に 下染に(龍)・下條に  
(東)・下條モタ(富)
- 76 生老病死の 生死病死(龍) 情分 情分(龍)・情分也(東)



- 神代ヨリ古人也 ナシ(龍)・文字アヤコ又アヤコ文字アヤコ又アヤコ神代ヨリ故人ナリ(東)・  
 文字アヤコ又アヤコ神代ヨリ故人ナリ(富)
- 96 ゆの 匂の(龍) 教誠ノ 教誠之(龍) すつるな すつな  
 (龍) 神秘ノ 神秘之(龍)・神秘(富)
- 97 ものをしふひとのノすきみのいらん ナシ(龍)・東・富) 速  
 連(龍)・速ハイ(東)・速ハイ(富)
- 98 ひくなれは ひくろわは(富)
- 奥書
- 秘歌三十首 和歌卅首(龍) 菅聖公 菅聖(龍)・東・富)  
 御心の 御心之(龍) よりとこる よりと言(東・富) 准  
 らへ 准らへ(東)・准らへ(富) 教ゆへし 教給ふ(龍)  
 しかあれとも 然有共(龍) 調 調(東) 曲高 たけた  
 かく(龍)・曲高く(東・富) あわれなる 哀れ成(龍)・あ  
 はれ成(東・富) おふる おほる(龍) 神ことを 神こと  
 我(東・富) のみ ナシ(龍) 天満天 天満天靈(龍)・  
 天満天玉アマノタマ(東)・天満天玉(富) くまもなし くまなし(龍)  
 神かたち 神影(龍) 逢たてまつりけり 奉逢(龍) 天  
 神の ナシ(龍) およく 多は(龍)・をよく(東・富)  
 かけし かけて(龍) 神こそは 神そとは(龍) かうよつ  
 の かうよつホノマの(龍)・かうよつホノマの(東・富) 聖化 聖地(富)  
 昇天の 昇天之(龍) 世の 世之(龍) 大慈大悲の大  
 慈大悲之(龍) 唱へ奉る 奉唱(龍)・唱たてまつる(東・富)

- 敬う 申(龍)・敬申(東・富) 日のもと 日本(龍)  
 あら人神と あらひと神と(富) いわれん 祝れん(龍)・  
 いはれむ(東・富) 月雪に 月雪の(龍) 現形し給ひ 現  
 形に給(龍)・現形し給(富) 詠哥を唱ふる時は ナシ(龍)・  
 詠歌をとなふるときは(東・富) 天神を 天満宮を(龍)  
 あかめ 奉崇(龍) やすらかにして あらはにして(龍)  
 一首 二首(龍) 御ちかい 御誓ひ(龍)・御ちかひ(東・富)  
 よくきけり 能聞り(龍) 三木 三木(東・富) 正二位  
 正三位(龍) 大蔵頭 大蔵卿(龍)・頭(東)
- 為長系図 (龍谷大学本二八ナシ)
- 菅家二位 菅二位(東・富) 古人 古人フルンド(東)・古人フルンド(富)  
 天平元賜菅原性 ナシ(東・富) 母伊氏 母八伊氏(東・富)  
 孝標 孝標タカスエ(富) 定義 大学頭 定義 大学守(富) 數世ニシ  
 テ菅家ヨリ出離ス ナシ(東・富)

(付記) 東北大学附属図書館狩野文庫蔵本の本文に関する情報は、道真仮託歌集を専門に研究している山口正代氏に提供していただいた。記して御礼申し上げる。

**“Ruritsubo no Eika Hyakushu” (Collection, Kansubon  
(Scroll-book)) An anthology of poems attributed to  
Sugawara no Michizane**

- Reprinting and Bibliography -

Yoshinobu SENO

“Ruritsubo no Eika Hyakushu,” one of the poetry anthologies attributed to Sugawara no Michizane, has been reprinted from a kansubon (scroll-book) from the author’s collection, with bibliographical notes added.

This book is classified under the category known as “A-system” according to Professor Kazuto Takei’s research. Previously, there were only four known collections of Sugawara no Michizane’s works - the collections at Ryukoku University, Tohoku University, Jissen Women’s University, and Toyama City Library. The reprinting of this kansubon (scroll-book) marks the discovery of the fifth collection. The special characteristics of this book are that it is the only kansubon (scroll-book), and its transcript is from 1729, which is the oldest known transcript. The other transcript whose year can be identified is the one at Tohoku University, which is from 1753.

The differences in the text between three of the collections, excluding the Jissen Women’s University’s collection, are described at the end of the book.

